主イエスのなさったこと

２００８．０４．１５（火）
ベック兄メッセージ（メモ）

引用聖句
ヨハネの福音書　１１章1節から１６節
　さて、ある人が病気にかかっていた。ラザロといって、マリヤとその姉妹マルタとの村の出で、ベタニヤの人であった。このマリヤは、主に香油を塗り、髪の毛でその足をぬぐったマリヤであって、彼女の兄弟ラザロが病んでいたのである。そこで姉妹たちは、イエスのところに使いを送って、言った。「主よ。ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。」イエスはこれを聞いて、言われた。「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」イエスはマルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。そのようなわけで、イエスは、ラザロが病んでいることを聞かれたときも、そのおられた所になお二日とどまられた。その後、イエスは、「もう一度ユダヤに行こう。」と弟子たちに言われた。弟子たちはイエスに言った。「先生。たった今ユダヤ人たちが、あなたを石打ちにしようとしていたのに、またそこにおいでになるのですか。」イエスは答えられた。「昼間は十二時間あるでしょう。だれでも、昼間歩けば、つまずくことはありません。この世の光を見ているからです。しかし、夜歩けばつまずきます。光がその人のうちにないからです。」イエスは、このように話され、それから、弟子たちに言われた。「わたしたちの友ラザロは眠っています。しかし、わたしは彼を眠りからさましに行くのです。」そこで弟子たちはイエスに言った。「主よ。眠っているのなら、彼は助かるでしょう。」しかし、イエスは、ラザロの死のことを言われたのである。だが、彼らは眠った状態のことを言われたものと思った。そこで、イエスはそのとき、はっきりと彼らに言われた。「ラザロは死んだのです。わたしは、あなたがたのため、すなわちあなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいます。さあ、彼のところへ行きましょう。」そこで、デドモと呼ばれるトマスが、弟子の仲間に言った。「私たちも行って、主といっしょに死のうではないか。」

　今日のテーマは『主イエスのなさったこと』。大切なのはそのことではないでしょうか。その意味で聖書が語っていることは、この世の宗教の言っていることとは反対です。
　宗教の場合は、「人間が、何をなすべきか、何を信じるべきか」です。
　しかし聖書は、「イエス様が、どうしようもない人間のために何をなさったか」ということを記しています。
ヨハネの福音書　１１章４５節、４６節

**そこで、マリヤのところに来ていて、イエスがなさったことを見た多くのユダヤ人が、イエスを信じた。しかし、そのうちの幾人かは、パリサイ人たちのところへ行って、イエスのなさったことを告げた。**

４５節の中で、「イエスがなさったこと」というみことばを読むことができ、また４６節でも、「イエスのなさったこと」というみことばが記されています。イエス様は大いなることをなさいました。

イエス様が地上で生活しておいでになったときに、どのようになさったのかを知りたいと思えば、四つの福音書を読めば良いと思います。

ルカは彼の書いた福音書の中に、「イエスが行ない始め、教え始められたすべてのことについて書いた」と記しています。マタイ、マルコ、ヨハネもみな、ルカと同じように書いたと思います。ですから、私たちは四つの福音書の中に、私たちの主イエス様のすばらしいお姿を見ることができます。

いわゆる福音書はそれぞれお互いに矛盾し合っている、という考えを持っている人もいます。しかし決してそうではありません。イエス様は一つ一つの福音書の中で、いろいろな違った側面から語られています。

すなわち、

・マタイ伝においては、イエス様はおもにユダヤ人のために語られ、イエス様が「王」として紹介されています。

・マルコ伝においては、イエス様が主の「しもべ」として明らかにされています。

・ルカ伝においては、「人の子」、「人間の子」しかも「完全な人間」としてのイエス様を述べています。

・ヨハネ伝においては、「神の御子」として、「イエス様の神性」が語られています。

このように私たちは四つの福音書を合わせて考察すると、一方においてイエス様の偉大さ、他方においてイエス様のご奉仕の本質を見ることができるのではないかと思います。ですから、私たちは「主よ。どうか私の心の目を開いてください」と祈りながら読むなら、驚かされます。なぜなら、イエス様のご人格とイエス様のなされたみわざが、私たちに明らかにされるようになるからです。

今日私たちが読む聖書の箇所は、主イエス様がラザロの復活との関連においてなさったことだけが取り出されます。イエス様は何を行なわれたのでしょうか。この質問に十分に答えるために、私たちは、本当はヨハネ伝１１章全部読むべきです。家にお帰りになってからゆっくり読んでください。イエス様とはどういうお方であるか、イエス様の愛とはどういうものか、イエス様の力、イエス様の恵みとはどういうものであるか、全部書き記され、証しされています。

　では、イエス様は何をなさったのでしょうか。手短にまとめるならば、四種類の答えがあげられます。

＊第一番目、イエス様は助けを求められましたが、意識して遅れて行かれました。しかし、その遅れて行くということは、最善の時でした。

＊第二番目、イエス様はマルタ、マリヤと苦しみをともにしてくださいました。

＊第三番目、イエス様は一人の信者が死ぬときに起こる事がらを明らかにされました。

＊第四番目、イエス様は霊、たましい、からだが再び一つにされることによって、ご自分の力を現わされたのです。

＊第一番目、イエス様は緊急に救助に来るように求められましたが、すぐに赴く代わりに、意識して遅らせ、即座に助けようとなさらなかったのです。

　イエス様には、三人の特に親しい友、マルタ、マリヤ、ラザロがいました。これら三人の友とはイエス様は何度も泊まったり、交わったりなさいました。そのラザロは病気になりましたが、その状態は早く悪化したので、彼の姉妹たちはイエス様に救助を求め、使いを走らせました。

ヨハネの福音書　１１章３節

**そこで姉妹たちは、イエスのところに使いを送って、言った。「主よ。ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。」**

「私たちは本当に困っています」と。

　イエス様はこの知らせをお聞きになったとき何をなさったのでしょうか。すぐ友を助けるために出かけられたでしょうか。私たちならそうなさることを期待するかもしれません。マルタとマリヤも期待したのではないかと思います。それは当然のことだったからです。しかし、イエス様は私たちが全く理解できないようなことをなさいました。すぐには出発しようとなさらなかったのです。なぜかといいますと、自分勝手に行動なさったことがないからです。その意味で私たちは、イエス様のことを全く理解することができません。イエス様はその知らせをお聞きになったとき、すぐに祈られたのです。「お父様。行きたいけれど駄目ですか」。「駄目です」。「そうですか」。４節です。

ヨハネの福音書　１１章４節

**イエスはこれを聞いて、言われた。「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」**

　みことばによれば、ラザロの病気は治りません。ラザロは死にます。けれど、「死」で終るだけのものではないとイエス様はおっしゃっています。次の６節。

ヨハネの福音書　１１章６節

**そのようなわけで、イエスは、ラザロが病んでいることを聞かれたときも、そのおられた所になお二日とどまられた。**

のんきですね、イエス様は…。私たちには全く理解できない態度ではないでしょうか。あまりにもひどい、と考えることもできるでしょう。しかし、イエス様はこのことを全く意識的になさいました。イエス様は何をなされればよいのかをもちろんご存じでした。しかし、み父に明らかにしていただきたかったのです。

ヨハネの福音書　１１章７節

**その後、イエスは、「もう一度ユダヤに行こう。」と弟子たちに言われた。**

このようなイエス様のおとりになった行動や、み父に全くお委ねになったことを考えると、私たちも同じようなことを経験したことがあると思います。私たちが助けを叫び求めました。私たちはイエス様が手を貸してくださるように切に祈り求めました。しかし、私たちの祈りは聞かれませんでした。私たちが期待したようになりませんでした。私たちの家族の誰かが死んでも、助けようとなさいませんでした。それは、ベタニヤでマルタとマリヤが千九百年以上も前に経験したことと、ちょうど同じことでした。当時のイエス様は何をなさったのでしょうか。

主は関与なさいませんでした。一見したところ、イエス様は聞こえない耳をもっておられたわけです。イエス様は彼らを助けるために急ぐことをなさらず、全く意識的に遅れてお出でになられました。そしてそのことは、まさしくイエス様がこんにちもなお、私たちになさることではないでしょうか。そのようなとき私たちはみな、「なぜ主はそうなさったのか」と思わざるを得なくなるのです。

しかし、私たちがここで述べられている七つの事がらに注目するなら、その疑問に答える一つの助けになるはずです。

１．「イエス様は愛してくださった」とあります。

ヨハネの福音書　１１章５節

**イエスはマルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。**

言うまでもなく主の愛は、人間の愛とは違う性質をもっているのです。イエス様の愛は理解したり把握したりできませんが、経験することができます。マルタもマリヤも、その愛を経験し、体験し、認識しました。彼女の生活はそれによって非常に豊かにされました。イエス様がマルタ・マリヤを愛してくださったからです。

２．イエス様は大変な苦しみをご存じでした。

マルタとマリヤは、イエス様のみもとに使者を遣わしました。ですから、イエス様はもちろんその情報を知らされていました。おそらく、すでにみ父から知らせていただかれていたのではないでしょうか。イエス様は、助けを求める叫びを確かに聞き取られました。

イエス様は、絶望的で重大な状態を知っておられたのです。イエス様に知られていない事がらは何一つありません。私たちはしばしば、イエス様が私たちに対して無関心であられると思いがちです。私たちは「イエス様によって愛されている」ということ、主は私たちの全ての問題についてよくご存じであられるということを忘れがちです。

３．イエス様はご自身の全能の力をもってラザロの死を止めようとはなさいませんでした。
ヨハネの福音書　１１章３２節

**「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかったでしょうに。」**

もちろんその通りです。いのちそのものであられるイエス様にとって、死を免れさせることは大したことではなかったでしょう。ラザロが癒されるためには、遠くからイエス様が一言おっしゃってくだされば、それだけで本当は十分だったはずです。

４．イエス様は、ご自分の友であるラザロの死を望まれたのです。
ヨハネの福音書　１１章３７節

**しかし、「盲人の目をあけたこの方が、あの人を死なせないでおくことはできなかったのか。」と言う者もいた。**

イエス様は、ラザロを死なせないでおきたいとは思われなかったのです。目先だけを見れば私たちは、「ひどい友だ」と言いがちです。それが真実の愛なのでしょうか。他の人を助けられたイエス様はなぜ、長い間親しい交わりを持ち、その住まいにしばしば招待された友ラザロをお助けにならなかったのでしょうか。

５．イエス様は出発なさる前、二日間同じところにとどまっておられました。
ヨハネの福音書　１１章６節

**そのようなわけで、イエスは、ラザロが病んでいることを聞かれたときも、そのおられた所になお二日とどまられた。**

ヨハネの福音書　１１章１７節

**それで、イエスがおいでになってみると、ラザロは墓の中に入れられて四日もたっていた。**

もちろん葬儀に間に合わなかったのです。葬儀も全部終わってしまい、屍は四日間も墓の中にありました。これはイエス様にとって、全く驚きでも手遅れでもありませんでした。イエス様は、そのことを知っておられたのです。み父から全部知らされていたからです。つまりイエス様をすぐに行かせなかったのは結局み父であられ、それは最善の時ではなかったからです。

６．その時イエス様は関与なさいました。
ヨハネの福音書　１１章４３節、４４節

**そして、イエスはそう言われると、大声で叫ばれた。「ラザロよ。出て来なさい。」すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたままで出て来た。彼の顔は布切れで包まれていた。イエスは彼らに言われた。「ほどいてやって、帰らせなさい。」**

イエス様が普通の人間だったら、おそらく小さい声でささやかれたかもしれません。「ラザロよ。出て来なさい」と。（もし出て来なければ困るでしょう。）イエス様は「必ず出て来る」と確信をもっておいでになりました。ですから大きな声で叫ばれたのです。イエス様が叫ばれると、死者もそれを聞きます。イエス様が命令なさると、何かが起こります。つまり不可能なことが可能になりました。そのとき存在していないものが、存在するようになったのです。そのとき、死も無力さを認めざるを得なかったので、死んでいたラザロがよみがえったのです。

７．マルタとマリヤがイエス様からいただいたものは、「彼女たちが祈り求めたことよりも素晴らしいもの」でした。
ヨハネの福音書　１１章４０節

**イエスは彼女に言われた。「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」**

彼女たちは、単に病気の癒しを経験しただけではなく、神の栄光を見ました。

今まで考えたこの七つの真理は、私たち全ての者にも当てはまるのではないでしょうか。
１．イエス様は私たちをも愛しておられます。しかも一人一人を、また全く個人的に愛しておられます。イエス様は誰に対しても決して無関心ではありません。一人一人を心にかけておられます。

２．イエス様は、私たちの状態を最も正確にご存じです。イエス様は背後の動機をご存じです。全てのことについて、イエス様は一定の目標を目指しておられます。イエス様によって知られていないことは何もありません。「イエス様はすべてご存じです」。これこそ大いなる慰めではないでしょうか。

３．主は私たちの悩みを変えることがお出来になります。完全にお出来になります。イエス様は、私たちが助けを求める叫びを聞いておられます。イエス様は聞くことと、聞き届けてくださることを約束してくださいました。ですから当然、約束を守る力をお持ちになっているお方です。

４．イエス様は、必ずしも私たちが考えるように答えてはくださいません。イエス様は私たちを、苦しみを通して訓練なさいます。そのとき、私たちは誘惑され、困難なことを体験することもあるでしょう。

５．イエス様はご自身である「主の時」に答えてくださいます。その「主の時」とは、「最善のとき」なのです。人間的に考えれば「遅過ぎた」というのは当然なことですが。

６．イエス様はその当時も助けてくださり、今日も助けてくださいます。イエス様は「主の時」が来れば、関与なさいます。悪魔によって惑わされないようにしましょう。

７．主の答えは、私たちが期待するものよりも常に、はるかに良いものです。ですから、希望をもって主を見上げ、主の偉大なみ力を期待しましょう。

なぜイエス様は、マルタ、マリヤ、ラザロに対して、そのような行動をなさったのでしょう。なぜ私たちは、こんなに多くの困難なこと、理解できないことを味わわなければならないのでしょう。

二つの理由を挙げることができます。

１．イエス様は理解できないことをたくさん許しておられます。私たちはそれによって苦しみに陥ります。私たちは「なぜ」という疑問を持つようになり、理由がわからなくなってしまうこともあります。それは確かに厳しい訓練です。しかし、まさにそのことを通して、主のご栄光が明らかにされるようになるのです。

ヨハネの福音書　１１章４節

「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」

死は決して終わりではありません。私たちが悲しみを加えるためでもなければ、あきらめたり全てを投げ出したりするためでもなく、主のご栄光が現われるために、私たちは理解しがたいことをいろいろと経験させられます。

イスラエルの民も荒野を通らなければなりませんでした。その時、のどは渇き、助けも遠く、太陽は照りつけ、敵にさらされました。しかし、主は助けとしてマナを与え、水も与えてくださいました。また、雲の柱と火の柱によってイスラエルの民を導かれました。イスラエルの経験したことは、苦しみと悩みを通して主のご栄光を見たということです。

２．主は主に属する者の信仰を試し、増し加えるために、理解しがたいことをお許しになります。苦しみがなければ成長もありません。私たちは苦しみに陥らなければ、真剣に

主の方に向くことがありません。私たちの上に何の重荷も置かれなければ、私たちは主の約束にしがみつくことをしないからです。
ヨハネの福音書　１１章１５節

**「わたしは、あなたがたのため、すなわちあなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいます。」**

これもまた、なぜイエス様がすぐに関与なさらず、私たちをひとりぼっちにさせられるかの理由なのです。私たちは、心が混乱して、出るべきか、入るべきかもわからなくなってしまいます。いくら考えても全くわからなくなってしまいます。しかし、私たちは次のことを忘れてはなりません。主のご栄光が明らかにされます。そして私たちは、そのことによって主によりいっそう近づけられ、信仰が強められるようになるということを。

＊第二番目、イエス様はマルタ、マリヤと苦しみをともになさったことを、この１１章を通して知ることが出来ます。

しばしば私たちは次のように尋ねられます。「家族の者が負傷したり、重病であったり、あるいは死んでしまうような時、イエス様は何も面倒を見てくださらないのでしょうか。または、配慮してくださるのでしょうか」と。私たちの祈りは応えられずに、そのままの状態で過ぎてしまうように思われるようなことがあります。というのは、たとえ私たちが祈ったとしても、主が簡単に防ぐことがお出来になったであろう死が起こることもあります。

そのことについては、一つのことが明らかです。主は、あらゆる人のことを心にかけておられます。主にとって、心にかけておいでにならない人は一人もいません。１１章３２節です。みことばがそれを明らかにしています。
ヨハネの福音書　１１章３２節から３５節

**マリヤは、イエスのおられた所に来て、お目にかかると、その足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、わたしの兄弟は死ななかったでしょうに。」そこでイエスは、彼女が泣き、彼女といっしょに来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になると、霊の憤りを覚え、心の動揺を感じて、言われた。「彼をどこに置きましたか。」彼らはイエスに言った。「主よ。来てご覧ください。」イエスは涙を流された。**

この３５節は、聖書の中で最も短い聖句です。「イエスは涙を流された」。「イエス様は私とともに泣かれた」とマリヤは言えたのです。イエス様は、ご自身に属する人たちを心にかけておられるお方です。イエス様はその人たちの苦しみや悩み、悲しみと一体となってくださるのです。私たちは、誘惑や患難の中に、ひとりぼっちに捨てられることはありません。

ヘブル人への手紙４章１５節を読んでみましょう。
ヘブル人への手紙　４章１５節

**私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでしたが、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。**

と記されています。イエス様は私たちのことを理解しておられます。
「主」が地上で生活なさったときに、イエス様も多くの悩みを経験なさいました。イエス様は、全く孤独であること、誰からも理解されないことが何を意味しているかご存じです。イエス様は悩みと苦しみを経験なさいました。ですからイエス様は肉体的な苦痛をご存じでした。イエス様は飢えと渇きにも苦しめられました。また疲れたこともおありでした。そして悪魔に抵抗することや、主のみことばだけに拠り頼むことが何を意味しているかをご存じでした。

あなたの苦しみはどのようなものでしょうか。それをイエス様に申し上げてください。イエス様は、あなたと一つになってくださり、あなたと共に涙を流してくださるのです。テモテ第一の手紙２章５節を見ると、次のように書かれています。
テモテへの手紙・第一　２章５節

**神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。**

「神としてのイエス・キリスト」と、書いてないのです。人間になることによってのみ、イエス様は代わりに罰せられ、救いの道を開くことがお出来になったのです。この主イエス様は、ここで「人としてのキリスト」と呼ばれていますが、主は、神であられ人間であられ、そしてまた人間であられ神であられるのです。その神性において、イエス様は主権者であられ、全能者であられ、栄光に満ちたお方でした。あえて人間となってくださったイエス様のご人格を申し上げるならば、イエス様は恵み深く理解してくださるお方であり、優しいお方です。
旧約聖書のイザヤ書６３章９節を読みます。
イザヤ書　６３章９節

**彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、…**

私たちは苦しみや苦痛によって、決してひとりぼっちにはさせられません。主にとって私たちは大切な存在です。主は、ただ私たちの最善だけを考えておられます。ですから、イエス様は私たちに困難を経験させられるのです。しかし、イエス様は共に悩んでくださいます。私たちがあえて私たちの全ての苦しみを主に申し上げるならば、主が共に苦しんでくださり、私たちのことを心配してくださり、主は最善の時に恵みの窮みをなしてくださるということを、私たちは経験するに違いありません。

＊第三番目、イエス様は、一人の信者が死ぬときに起こる出来事、事がらを、明らかになさいました。

ラザロは死にました。本当に死にました。

ヨハネの福音書　１１章１４節

**そこで、イエスはそのとき、はっきりと彼らに言われた。「ラザロは死んだのです。」**

ラザロは死にましたので、マルタはイエス様が墓のところに来られた時、もはや奇跡を信じることができなかったのです。

ヨハネの福音書　１１章３９節後半

**「主よ。もう臭くなっておりましょう。四日になりますから。」**

とラザロの姉妹は言いました。ラザロはただ死んだだけではなく、その死体はすでに腐り初めていました。しかし私たちはイエス様が友の死にもかかわらず、次のようにおっしゃったことに、注目したいと思います。

ヨハネの福音書　１１章１１節後半

**「わたしたちの友ラザロは眠っています。しかし、わたしは彼を眠りからさましに行くのです。」**

つまりイエス様は、信者の死が、「眠っているのと同様である」とおっしゃるのです。私たちは夜寝るとき、疲れ果ててくたくたになり、「おやすみなさい。明日の朝まで」と言います。夜の眠りは回復と力の結集のために必要です。救われた者が死ぬと、からだそのものはよみがえりのときまで眠ると聖書は語っています。からだは眠りますが、霊はイエス様のみもとに行きます。

コリント第二の手紙５章６節を読むと、次のように書かれています。

コリント人への手紙・第二　５章６節

**そういうわけで、私たちはいつも心強いのです。ただし、私たちが肉体にいる間は、主から離れているということも知っています。**

生きている間、ある意味で主から離れていると。

コリント人への手紙・第二　５章８節

**私たちはいつも心強いのです。そして、むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています。**

つまり「死ぬこと」、「肉体を離れること」とは、「主のみもとにいる」ことであると、はっきり書かれています。

初代教会の最初の殉教者は、ステパノという男でした。使徒行伝７章を読むと、彼は石で打ち殺されてしまったのです。しかし、彼はイエス様に向かって祈ったのです。

使徒の働き　７章５９節、６０節

> こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで、こう言った。「主イエスよ。私の霊をお受けください。」そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」こう言って、眠りについた。

彼の霊は急いで、イエス様のみもとに行きました。彼が祈ったからです。「主イエスよ。私の霊をお受けください」と。この祈りはもちろん聞き届けられました。しかしからだは眠りにつきました。からだは、将来よみがえらせるために眠りにつきました。

そのことについて、パウロは次のように書き記したのです。よく知られている箇所です。テサロニケ第一の手紙の４章は、いわゆる再臨、空中再臨についての箇所です。よく読むべき箇所です。すなわちテサロニケにいる人々は何を経験したかと言いますと、イエス様を信じながら、いろいろな人が病気になって死にました。これは「いったいどういうことですか」とパウロは聞かれ、結果としてこのように書いたのです。

テサロニケ人への手紙・第一　４章１３節

> 眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。

「眠った人々」とは、死んだ人々です。望みのない人々はたくさんいます。イエス様を知らなければ、みなそうなのです。

テサロニケ人への手紙・第一　４章１４節から１８節

> 私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。私たちは主のみことばの通りに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。

悩んでいる人々に何と言ったら良いのでしょう。「私たちは、いつまでも主とともになる」と。これは考えられない栄光です。

また次のように尋ねるかもしれません。「どうして、からだが墓の中で何年もたってからよみがえることができるのでしょうか。本当に肉体の復活は存在するのでしょうか」と。

この質問に対し、イエス様は何をなさったのでしょうか。

＊第四番目。イエス様は、霊、たましい、からだが再び一つにされることにより、ご自身の力を現わされました。

ラザロの体がすでに腐り始めた後でさえ、ラザロの霊、たましい、からだは一つになりました。ラザロは、すでに四日間も墓の中にいました。マルタは次のように言っています。「主よ。もう臭くなっておりましょう」。ここでは奇跡が必要でした。死んだからだにいのちを与えることだけではなく、もうすでに腐ってしまったからだそのものが新しくされなければならなかったからです。

ラザロをよみがえらせ、彼のからだを新しくすることは可能なのでしょうか。前に読みました箇所です。

ヨハネの福音書　１１章４３節、４４節前半

**そして、イエスはそう言われると、大声で叫ばれた。「ラザロよ。出て来なさい。」すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたままで出て来た。**

と書かれています。ラザロは生き生きとして、健康で墓から出て来ました。まさに同じことは、すでに死んだ全ての信者が経験するに違いありません。もちろんそれは古いからだではなく、完全に新しいからだです。

ピリピ人への手紙の中で、パウロはこの事実について、次のように書き記したのです。ローマの刑務所の中で書いた手紙です。

ピリピ人への手紙　３章２０節、２１節

**けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。**

ラザロは死者からよみがえりました。しかし彼はその後、再び墓の中に入らなければならなかったのです。彼は重い病気となり、死ぬまで多くの苦痛を耐えなければならなかったかもしれません。けれど、私たちの新しいからだはもはや病気に服従しません。それは栄光のからだとなるのです。

この事実について、パウロは、コリント第一の手紙の１５章で書いたのです。いわゆる「よみがえりの書」と言われている箇所です。

コリント人への手紙・第一　１５章３５節から３８節

ところが、ある人はこう言うでしょう。「死者は、どのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか。」愚かな人だ。あなたの蒔く物は、死ななければ、生かされません。あなたが蒔く物は、後にできるからだではなく、麦やそのほかの穀物の種粒です。しかし神は、みこころに従って、それにからだを与え、おのおのの種にそれぞれのからだをお与えになります。

コリント人への手紙・第一　１５章４２節から４４節

死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものによみがえらされ、卑しいもので蒔かれ、栄光あるものによみがえらされ、弱いもので蒔かれ、強いものによみがえらされ、血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。

コリント人への手紙・第一　１５章５４節から５７節

しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた。」としるされている、みことばが実現します。「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」死のとげは罪であり、罪の力は律法です。しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。

これは、初代教会の絶えざる喜びの根拠でした。「キリストによって、私たちに勝利を与えてくださった」。

私たちは今までに四つの事実について考えてきました。

第一番目、人々はイエス様に助けを求めましたが、イエス様は意識的に遅れて行かれました。しかし、その遅れて行かれたということは、最善の時でした。

第二番目、イエス様は、マルタとマリヤと苦しみを共になさったのです。

第三番目、イエス様は、一人の信者が死ぬときに起こる事がらを明らかにしてくださいました。

第四番目、イエス様は、霊、たましい、からだが再び一つにされることによってご自身の力を現わされたのです。

ヨハネ伝１１章４５節を、もう一度読みます。

ヨハネの福音書　１１章４５節

そこで、マリヤのところに来ていて、イエスがなさったことを見た多くのユダヤ人が、イエスを信じた。

私たちの場合は、どうでしょうか。イエス様を信じているのでしょうか。本当に心から

イエス様を信じ、イエス様に信頼しているのでしょうか。

ヨハネ伝１１章は、私たちが何とすばらしい救い主を持っているかを、私たちに示しています。イエス様は、その愛において、理解することにおいて、また赦しにおいて、唯一無比のお方です。私たちはもっと主に信頼すべきなのではないでしょうか。そうすれば、私たちはローマ書８章２８節で約束されていることを、もっとよく理解するようになるに違いありません。

ローマ人への手紙　８章２８節

**神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。**

と初代教会の人々は確信したのです。すべては、すべてです。

イエス様がペテロにおっしゃられたことばです。

ヨハネの福音書　１３章７節

**「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。」**

イエス様は一つのご計画を持っておいでになり、このご計画に沿って活動なさいます。私たちには多くのことが隠されています。私たちは暗闇の中を手探りしている者です。

主のご計画は、私たちの生活の中でいかに実現されるのでしょうか。

イエス様がすぐには関与なさらないことにより、私たちが失望させられることによってです。また、イエス様が一つ一つ説明なさらずに私たちの上に困難をお与えになることによってです。

困難なこと、理解しがたいことを通して、私たちは次のように証しするようになるはずです。これを読んで終わります。

サムエル記・第一　３章１８節後半

**「その方は主だ。主がみこころにかなうことをなさいますように。」**

私たちはみな、次のことを経験することでしょう。

「主のなさることは、私たちのために常に良く、常に主の御名の栄光を拝させていただける結果となる」ということを。

了